林業技術センター情報

コウヨウザンと獣害

林業研究部　研究員　古本　拓也

はじめに

広島県ではヒノキ、スギ、アカマツが主な造林用樹種ですが、平成28年からコウヨウザンの植栽が始まっています（写真1）。

写真1　コウヨウザン苗木

コウヨウザンは成長が早く、「早生樹」のひとつに位置付けられています。成長が早いことのメリットとして、植えた後に周りの植物を刈り取って苗木が覆われないようにする「下刈り」の回数を減らすことができ、作業に必要な人手とコストを減らすことに繋がります。

苗木を食べる動物と防除対策

獣により植えた苗木が食べられたり、傷つけられる「獣害」が多くの造林地で発生しています。

造林木を食べる獣として、シカやウサギ、ネズミなどが知られています。特にシカは生息数や生息域が増えており、学習能力も高いことから対策が難しい厄介な存在です。一般的には、シカが造林した場所に入れないように防護柵で囲んで苗木を守ります。その他に、筒状のカバー（ツリーシェルター）を苗木に被せて守る方法や、シカが嫌がる成分を苗木に付着させる方法、シカの数を減らすために捕獲する方法などで対策がされています。

コウヨウザンの獣害

コウヨウザンもヒノキやスギと同じく、シカやウサギ、ネズミから獣害を受けることがわかってきました（写真2、3、4）。その中でもヒノキやスギと比べてウサギ害を受けやすいという傾向があるようです。山にいるウサギは一般的にノウサギと言われ、夜行性であるため昼間は隠れており、ほとんど見かけることがありません。

写真4　コウヨウザンの葉を両前足で掴みながら食べるノネズミ

写真3　コウヨウザン造林地で撮影されたノウサギ

写真2　コウヨウザン造林地で夜間に赤外線カメラにより撮影されたシカ

獣害の犯人の見分け方

目の前で苗が食べられている様子を見ることは難しいですが、獣害の跡を見ることで、どの獣の被害を受けたかをある程度見分けることができます。

コウヨウザンのウサギ害では、茎や枝がナイフで切られたように綺麗に切断された跡が残ります（写真5）。

写真5　コウヨウザン苗木がノウサギに食われた跡

シカ害では、ウサギ害と比較すると噛みちぎられたような跡が残り、樹皮が毛羽立ちます（写真6）。

写真6　シカに食われた跡

ネズミ害は、主に地面付近の細かい葉や樹皮がかじり取られるような跡が残ることが特徴です（写真7）。

写真7　ノネズミに食われた跡
よく見ると葉がかじり取られている。

しかし、複数の動物が同じ造林地にいる場合は、獣害の跡だけではどの動物がいるか判断しきれないこともあります。

その他にも造林地に残された糞から、シカとウサギの存在が確認できます。（写真8）

写真8　ノウサギの糞（左）とシカの糞（右）
ノウサギの糞は饅頭、シカの糞は俵のような形

ウサギ害防除方法

苗をウサギ害から守るにはどうすればよいでしょうか。

シカ柵を設置して苗を守ろうとしたとき、ウサギはシカ柵の網目（10cm×10cm）を通り抜けることができるようです。また、場合によってはウサギの存在に気付かずに柵を設置してしまい、内部にウサギを閉じ込めてしまうことも考えられます。

ツリーシェルターは、カバーされている部分を守る効果が高く、最も安全な防除方法であると考えられますが、1本当たりの資材費が高価で、設置にも手間がかかります。また、苗木が成長してカバーの高さを超えたとき、ウサギの口が届く位置（地上高70cm程度）にある枝は食べられてしまうことがあります。特に積雪地では注意が必要で、ウサギは雪の上を移動するため、積雪の高さ分高い位置まで口が届いてしまいます。そのため積雪高＋70cm程度の資材高が必要であると考えられます。

苗木にウサギが嫌がる成分を含む農薬（忌避剤）を付着させる方法は、シカ防護柵やツリーシェルターを設置する方法と比べて作業が簡単です。ただし、忌避剤が付着している部分以外は防除効果が低くなるため、苗木が成長して新たに伸びたところは食べられやすくなります。そのため、年に数回使用する必要がありますが、種類によって回数制限が異なりますので、それぞれの農薬の使用方法に従って使用します。

おわりに

当センターでは、安芸高田市や廿日市市に試験林を設定して、複数の資材について防除効果を検証する試験を進めています。コストや設置手間も含めてどの方法が最も効果的かを明らかにしていきたいと思います。

また、この報告に関する研究は農林水産省委託プロジェクト「成長に優れた苗木を活用した施業モデルの開発」の支援を受けて行われました。

【林業技術センターホームページ】http://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/33/1219628260277.html